

ハイデルベルク信仰問答より

問 116 なぜ、キリスト者は祈る必要があるのですか。

答え それは、神が私たちにお求めになる感謝の主要な部分であり、神はその恵みと聖霊とを、心から、絶えず求め、これらの賜物を神に感謝する者にのみあたえられるからであります。

〔別訳〕

答え なぜなら、祈りは、神がわたしたちにお求めになる感謝の最も重要な部分だからです。また、神が御自分の恵みと聖霊とを与えようとなさるのは、心からの呻きをもって絶えずそれらをこの方に請い求め、それらに対してこの方に感謝する人々に対してだけ、だからです。

本書第三部、「人間の感謝と服従——聖霊による新しい生活」の中に、十戒と主の祈りの説き明かしが含まれています。十戒の学びを終えて主の祈りに入るに先立ち、「なぜ、キリスト者は祈る必要があるのですか」という問いが投げかけられます。私たちの信仰生活に「祈り」があるかどうか問われているわけですが、実際に私たちは生活の何割の時間を祈りに費やしているのでしょうか。祈りが重要であると言われるだけに、十分な時間を祈りに費やせていない自分に後ろめたさを感じる人が少なくないかもしれません。祈りは「呼吸をするように」と言われることがありますが、祈りにもいくつかのスタイルがあることを認識する必要があります。

私禱……個人の生活の中で特別に時間を取り分けて祈ること

公禱……公的な場面で代表の祈りをささげること

常禱……生活のあらゆる場面で神を覚え祈りとする（奥村の造語）

「常禱」を生活の中に取り入れるならば、まさに「呼吸をするように」祈り続けることができるでしょう。しかし、そのためにはどんな時にも自分の目の前に主を置いて生きている必要があり、常に神に信頼していなくてはなりません。

問 116 の答えでは、祈りは「神が私たちにお求めになる感謝の主要な部分」だと言われています。祈りの本質とは「願い」ではなく「感謝」であるということです。神に対する感謝はどのような状況で心に湧き口に上ってくるのでしょうか。それは多くの場合、何らかの危険から守られたとき、悪い状況が好転したとき、願いが叶えられたときなど、物事の良い結果を見たときであると思います。しかし、ここではむしろ、そのような結果を見ていなくても感謝をささげるべきであると教えられているようです。感謝は、全体として神の御業を見るときに、その過程がどうであれ最善の結果に至ると知っているところから、常にささげることが可能になります。たとえ辛いところを通ることがあったとしても、それを含めて神の聖なる御心が成るのであれば、目先のことに一喜一憂するのではなく、神の御手に委ねることができます。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。（Iテサロニケ 5:16-18）

このパウロの教えの中でも「祈り」と「感謝」は並べられています。絶え間なき祈りと感謝は切っても切れない関係にあることが分かるでしょう。

次に「神はその恵みと聖霊とを、心から、絶えず求め、これらの賜物を神に感謝する者にのみあたえられる」という部分を見てみましょう。ここで言われている「賜物」とは「恵みと聖霊」であることが分かります。神は人に賜物としてこれらのものを与えてくださいます。しかし、それは「心から、絶えず求め」る人に対して与えられます。これから学んでいく「主の祈り」が、「聖霊による新しい生活」の中に置かれているということは、私たちが聖霊によって造り変えられることを慕い求めるところにこそ、「恵みと聖霊」の賜物は与えられるということになるでしょう。

私たちが何らかの罪を犯すとき、その行動と結びついているのは「肉の性質」であって、それは各々の人生の過程において身に付いてしまった「歪み」とも言えます。しかし、そのような自分の中の課題に気づき、真に良くなりたいと願い、聖霊にふれていただくことを求めるとき、それらの縄目から解放していただくことができます。聖霊は、私たちの内の最も根本的な部分にふれることがおできになるからです。私たちがすべてのことに感謝して生きられるように、その障害となっているものを一つひとつ取り除けてくださるでしょう。

私は大学生の頃、自分のアイデンティティの問題に直面し、愕然としました。自分の歩んできた道が歪みに歪んでいたことに気づいたのです。そして、その原因は自分の心の問題にあったことがはっきりと分かりました。20年間病んだ心で生きてきた私は、さながらベテスタの池の側で癒されることを求めている病人の姿と自分とが重なって見えてきました。

エルサレムには羊の門のそばに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。その回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたいか」と言われた。（ヨハネ 5:2-6）

主イエスは私にも「良くなりたいか」と声をかけてくださいました。私はその呼びかけに「はい、主よ、私を癒すことができるのはあなただけです」と応えました。それから四半世紀の人生を歩んでくるなかで、この心に住んでくださった聖霊が一つひとつ癒してきてくださったことを実感しています。そして、残りの生涯においてもその聖化の御業は継続されていくはずで、誰もがこの聖霊の働きを受けられるということを宣べ伝えていきたいと思えます。